



三浦綾子の死生観とキリスト教信仰

松本 周

宮城女学校設立から 137 年を数える宮城学院の歴史に数多くの事象が刻まれている。その歴史の一コマとして、宮城学院を訪れたキリスト教作家である三浦綾子を取り上げる。

三浦綾子の宮城学院来訪は 1968 年 10 月 13 日であった。「小説「氷点」の作家三浦綾子女史を大講堂にお迎えして「私を変えた愛」と題する同窓会主催の講演会を開催。女史はキリスト教の厚い信仰に支えられて、常に文学と宗教との接点を追求され、祈りのうちに執筆されるという人柄に、同窓会は深い共感を覚え以前から女史とご交際のあった同窓会顧問の佐藤利吉先生のご尽力によって実現の運びとなった。同窓生のみならず、一般の方々にも解放したので、会場は立錐の余地もないほど盛況であった」¹と記録されている。

三浦は作品の中で自身のキリスト教信仰を明確に表現しているが、それと共に三浦自身の人生経験に基づく「死と生」というテーマが諸作品を貫いている。本論考では三浦作品に込められた、死生観とキリスト教信仰について考察する。

まず、三浦の生涯を略年譜で確認する。

- 1922 北海道旭川市生まれ
- 1939 旭川市立高等女学校卒業、小学校教員になる
- 1946 軍国主義教育に関わった自責の念から教師退職
肺結核発病
- 1952 キリスト教の洗礼を受ける
- 1959 三浦光世と結婚
- 1963 『氷点』発表
- 1966 『塩狩峠』連載開始
- 生涯にわたりさまざまな病氣と格闘しながら、死を意識した主題、聖書とキリスト教信仰に関わる作品を多数執筆。
- 1999 逝去

¹ 宮城学院最近十年小史編集委員会編『宮城学院最近十年小史』昭和 52 年、75 頁。

敗戦と発病における「死」の意識

三浦の生涯の中で、とりわけ1946年の教師退職から1952年に洗礼を受けてキリスト教に入信するまでの期間に注目したい。そこに本稿の主題である「死生観とキリスト教」が集中的に観察されるからである。なお三浦は自伝小説『道ありき』において「自分の心の歴史」²として精神の変遷を記しているため、同書を基に以下を記述する。

三浦は1946年に死を意識したことを「敗戦後割腹した軍人たちのように、わたしたち教師も、生徒の前に死んで詫びなければならないのではないだろうか」³と記している。これには1945年の日本敗戦により、社会の価値観が根底的に転換したことが関係している。戦時中に小学校教師であった三浦は子どもたちへ熱意を込めて教育を施していた。しかし敗戦後には国定教科書に墨を塗ることを子どもたちへ指示することになった。戦時中に「正しい」とされたことが、敗戦後の占領下日本では「正しくない」とされる。三浦は自分の教えた内容を振り返って「そうした時代の教育は、天皇陛下の国民をつくることにあったわけである。だから、この教育に熱心であるということは、私の人間観が根本から間違っていたということになる」⁴と述べている。三浦自身は正しいことと思い熱心に教育したが、その教育は子どもたちを戦場へ赴かせることに帰着するものでもあった。

敗戦により社会的な価値秩序の転覆に直面した三浦は、小学校教師退職を自らの精神的死につながるものとして受け止めた。さらに同年に三浦は肺結核を発病する。その事態に直面した三浦は「ここで死んだとしても、それほど残念だとは思わなかった。……わたしには、生きる目標というものが見つからなかった……何を目標に生きて良いかわからないのに、生きているということは、ひどく苦痛であった……すべての存在が、否定的に思われてくる。自分の存在すら、肯定できないのだ」⁵と心境を述べている。価値体系の崩壊による社会的死と生きがいであった教師を辞めることによる精神的死、発病による身体的死の予感、三浦はこれらの「死」に取り囲まれていた。しかもそれらの死を跳ね返して、生きる方向へと自らを向かわせる意志を三浦は喪失していた。身体的生命はかろうじて活動しているが、スピリチュアルな側面としてのいのちが失われている、それが1946年時点での三浦の生における「死」の体験であった。

前川正との交流と「生きる意味」の発見

「死」に包囲された精神状態から三浦の病氣療養生活は始まった。生きる意味を見いだせず、自暴自棄になっていた三浦に対し、幼なじみの前川正が生きることへと三浦に繰り返し語りかけた様子が『道ありき』に描写されている。

² 三浦綾子『道ありき』新潮文庫版、昭和55年、5頁。

³ 三浦『道ありき』19頁。

⁴ 三浦『道ありき』16頁。

⁵ 三浦『道ありき』29頁。

「綾ちゃん、いったいあなたは生きていたいのですか、いたくないのですか」彼の声が少しふるえていた。

「そんなこと、どっちだっていいじゃないの」実際の話、わたしにとって、もう生きるということはどうでもよかった。むしろいつ死ぬかが問題であった。小学校の教師をしていた頃の、あの命もいらぬような懸命な生き方とは全く違った、「命のいらぬ」生き方であった。

「どっちだってよくはありません。綾ちゃんおねがいだから、もっとまじめに生きてください」前川正は哀願した。⁶

こうした前川の態度に、三浦は当初反発する。生きがいを喪失し、病の進行のままに「不作為による死」さえ願っていた三浦であった。しかし三浦に生きるよう促し続ける前川は、医学生としての専門知識もふまえて自身が結核により限られた命であることを自覚していた。「彼は自分の命が、あと何年ももたないことを知っていて、その命をわたしに注ごうと思っていたのである」⁷と三浦は述懐している。そしてここに表現される、前川の命を受け渡される三浦の命という思考に、三浦作品における死生観の特徴である「犠牲」理解の萌芽を見いだすことができる。

前川との人格的交流を通して三浦は「生」を充実させていくことになる。「彼の背後にある不思議な光は何だろうと、わたしは思った。それは、あるいはキリスト教ではないかと思ひながら、わたしを女としてではなく、人間として、人格として愛してくれたこの人の信じるキリストを、わたしはわたしなりに尋ね求めたいと思った。」⁸それは同時に前川の生き方を基礎づけていたキリスト教信仰への希求と結びついていく。その結果、三浦のキリスト教入信の決意は死生観との強い結びつきをもって表明されるに到る。以下は、キリスト教入信時における三浦の心象風景である。

恐らくこの病院の重症室で、人の死ななかつたベッドはひとつもないにちがいない。そしてまた、わたしも今こそ古い自分がここで死ぬのである。

「人もしキリストに在らば新たに造られたる者なり、古きは既に過ぎ去り、見よ新しくなりたり。(コリント後書五章一七節)」

この聖書の言葉のように、古いわたしは死に、そして新しくイエス・キリストに生きる者として生れ変わらなければならないのだ。人の死んだベッドの上こそ、今後の療養生活にふさわしいと、心からわたしは思ったのである。⁹

⁶ 三浦『道ありき』78頁。

⁷ 三浦『道ありき』74頁。

⁸ 三浦『道ありき』81頁。

⁹ 三浦『道ありき』217-218頁。

新しく生きる決心と共に、三浦は洗礼を受け、キリスト教信者となった。かつて自らの人生に精神的・社会的死を宣告し、生きる意味の喪失から希死念慮を抱えていた三浦が、前川および彼のキリスト教信仰と出会うことによって、生きることへと自己を向かわせ、生きる意味を新たに求める人生となった。キリスト教入信がその後の三浦における文学創作の原動力となり、作品に「死と生」が主題的に展開される原点となった。次項では三浦の死生観が「犠牲」認識へと収斂され、作品に表現される形姿を考察していく。

三浦における「犠牲」理解としての死生観

キリスト教入信を大きな契機として、死ではなく生へと人生を方向づけた三浦は、それからほどなくして試練を迎える。「昨年七月、敬愛する西村先生を失い、それから一年もたたぬうちに、最愛の前川正も天に召された。当時のわたしは、この世よりも、天国の方が慕わしく思われてならなかった。」¹⁰ 三浦をキリスト教入信へと導く役割を果たし、親密な人格関係にあった二人の人物の死を立て続けに経験した際の心境が語られている。此岸よりも彼岸に憧れようとする三浦の願望は、しかし以前のように自らの死を願ったり、生の意味を喪失したりする結果にはならなかった。

三浦は前川の死と自らの人生を次のように関連させる。

わたしは、三十五歳で死ななければならなかった前川正が、もしこの後も生きていたならば、いったい何をしようと思うであろうか。死んだ彼の分まで、わたしは生き通さなければならないのだと、ともすればくずおれそうな自分の心を鞭打っていた。

(正さんは病気がなおらなかったのだ。わたしはなおらなければならない。あの人は歌を作ったのだ。わたしは作らなければならない。あの人は教会に行きたかったのだ。わたしは教会に行かなければならない)

彼が生きなかったであろうように、わたしは彼の意志を受けついで、生きられるだけ生きようと決意した¹¹。

自分を愛してくれる相手の命を受けついで自分が生きる。その事態を相手の側から捉え返せば、自分が生きるために相手が命を差し出している、すなわち「犠牲」という表現になる¹²。そして相手から命を受け取るという意味での三浦の犠牲理解は、イエス・キリストと自己との関係理解へ結びつく。「このわたしの命は、イエス様の命と引替に与えられ

¹⁰ 三浦『道ありき』272頁。

¹¹ 三浦『道ありき』280頁。

¹² その後に三浦と出会い、結婚することになる三浦光世は「神様、私の命を堀田〔三浦の旧姓〕さんに上げてよろしいですから、どうかなおしてあげてください」(三浦『道ありき』298頁)と祈ったという。これも三浦の「犠牲」理解に結びつくエピソードである。

たものなのだ。いまやっと、それがわかった。頭ではなく、胸でスカッとわかった。わたしの命が尊いということの、本当の意味がわかった。」¹³ イエス・キリストの死から、自己の生へと命を受け取ったという認識が、三浦における犠牲理解の根底に存する。そしてキリスト者がイエスの生き方を反映している存在だと考える故に、三浦はキリスト者であった前川が「その命をわたしに注ごうと思っていた」という仕方で、キリスト者の生を犠牲的生き方として把握するのである。

三浦の理解する「犠牲的生」が作品に現れ出ている諸相を、以下に観察したい。「犠牲」がもっとも主題的に扱われる作品は『塩狩峠』である。三浦自身が明確に「犠牲」というテーマを意識して執筆している。作品の最終部には次のような描写がある。

「永野さんが……」「どうしたんだ?!」「犠牲の死です」

若い青年が叫んだ。そこで吉川は、人々から事件のあらましをきかされた。吉川は呆然とした。線路の上に飛びおりた信夫の姿が鮮やかに目に浮んだ。純白の雪に飛び散った信夫の血を、吉川は見たような気がした。信夫にふさわしい死に方のような気がした。¹⁴

「うん、永野はね……永野はね……、ふじ子、永野は自分が汽車の下敷きになって、汽車をとめたんだ。そして乗客全部の命を助けたんだ」¹⁵

『塩狩峠』主人公であるキリスト者の永野信夫は、自分の身を挺して暴走する客車を止め、乗客の命を助けた。三浦はその行為を作品登場人物の口をして「犠牲」と語らせる。さらに永野のキリスト教信仰と結びつけ「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん」その聖書の言葉が、吉川の胸に浮んだ¹⁶と作品中に記される。したがって三浦は、キリスト教を信じる人間とは、イエス・キリストが十字架でそうであったように、犠牲的生き方へ極まることを理想と考えていると解される。

三浦の犠牲理解は『塩狩峠』のみならず他の作品にも見いだされる。三浦を世間に広く知らしめた作品である『氷点』では、青函連絡船洞爺丸の台風による沈没事故の場面で、次のような出来事が描かれる。

「ドーシマシタ？」 宣教師の声は落ちついていて。救命具のひもが切れたと女が泣いた。「ソレハコマリマシタネ。ワタシノヲアゲマス。」「アナタハ、ワタシヨリワカ

¹³ 三浦『道ありき』317頁。

¹⁴ 三浦綾子『塩狩峠』新潮文庫版、昭和48年、330-331頁。

¹⁵ 三浦『塩狩峠』334頁。

¹⁶ 三浦『塩狩峠』344頁。なお、ここで引用された聖書箇所はヨハネによる福音書12章24節である。

イ、ニッポンハワカイヒトガ、ツクリアゲルノデス」¹⁷

キリスト教宣教師が自分の救命具を見ず知らずの相手の命を助けるために譲り渡し、宣教師の命は失われた。この描写について三浦自身が他の著作で解説的に述べている。「私の小説『氷点』の中にも書いたことだが、昭和二十九年秋、青函連絡船洞爺丸が、台風に襲われて座礁転覆した。……二人の外人宣教師が同乗していたが、救命具を持たぬ若い男女に、自分たちの救命具を与えて死んでいった。……彼らが救命具を与えたのは人に見せるためではない。……誰一人見る者のない中で、彼らは自分の命ともいべき救命具を、人に与えたのである。誰が見ていなくとも、見ていてくださる神への信頼のもとになし得た行為であると思う。」¹⁸『塩狩峠』の永井と同じく、『氷点』における宣教師たちも実話に基づいている。彼らの犠牲的行為について三浦は、人から英雄視されるためではなく、ただ「神への信頼」すなわち自らが信ずる神への応答的生き方が犠牲という行為に結実したと理解する。

三浦がキリスト者の犠牲行為について、他者からの評価を得ようとするものではなく、神との関係から生じる自発的行為だとするのは、その動機の信仰的純粋性を強調していると捉えられる。しかしながら現代思想との対論においてまさにこの点が、検討すべき重大な点となる。一度、三浦のテキストから離れる形になるが、現代における「犠牲」批判について概観しておきたい。その批判は三浦の作品における「犠牲」理解に対しても向けられると考えるからである。

「犠牲」をめぐる議論と三浦の思想

キリスト教信仰はその基盤にイエス・キリストの十字架における犠牲という理解を有するがゆえに、三浦以外のキリスト者作家もまた「犠牲」について言及する。以下に、代表的な二人の作品例を取り上げる。

一人は吉田満である。『戦艦大和ノ最期』に次のような記述がある。「今日覚メズシテイ ツ救ハレルカ 俺タチハソノ先導ニナルノダ 日本ノ新生ニサキガケテ散ル マサニ本望ヂヤナイカ」¹⁹第二次世界大戦での日本の敗戦が濃厚になる中で、戦艦大和が出撃する。死を覚悟する状況下で、自分たちの死に意味があるのかと兵士たちが論争する中で、臼淵大尉が述べたと記される言葉である。日本という国が真に目覚めて新生するための、さきがけとしての犠牲が戦艦大和乗組員の死が持つ意味であると語り、この発言をもって論戦を終止させたと記されている。

もう一人は永井隆である。『長崎の鐘』中での「原子爆弾合同葬弔辞」に、以下のよう

¹⁷ 三浦綾子『氷点 上』角川文庫版、昭和57年初版、平成24年改訂初版、374頁。

¹⁸ 三浦綾子『新約聖書入門』光文社文庫版、1984年、57頁。

¹⁹ 吉田満『戦艦大和ノ最期』講談社文芸文庫版、1994年、46頁。

な言がある。「主与え給い、主取り給う。主の御名は賛美せられよかし。浦上が選ばれて
 燔祭に供えられたることを感謝致します。この貴い犠牲によりて世界に平和が再来し、日
 本の信仰の自由が許可されたことに感謝致します。」²⁰ 永井は原子爆弾の長崎投下わけても
 爆心地が浦上天主堂であったことは、世界平和と日本での信仰の自由実現のための「犠
 牲」であったと述べている。

こうした犠牲理解を日本社会や国家との関連で強く批判するのが高橋哲哉である。「近
 代国民国家において国家のために死ぬこと＝殉国が聖なる行為とされ、それを行なう者が
 聖化・聖別される構造は、キリスト教において神の国のために死ぬこと＝殉教が聖なる
 行為とされ、それを行なう者が聖化・聖別される構造と完全に重なる」²¹ として批判する。
 キリスト教が内包する犠牲を美化する論理は、近現代において国家のために犠牲を強いる
 思想を補強するものであるとして、「犠牲」という思想や論理を全面的に否定すべきもの
 と高橋は捉えている。「犠牲」という発想自体を根本的に否定する高橋の論に従えば、三
 浦が作品の中で繰り返し強調する犠牲理解もまた否定され棄却されるべきものというこ
 となる。

犠牲思想について、高橋と異なった見解を提示するのは島菌進である。「死ぬに値する
 行為はある。愛する他者のため、自らが育てられた共同体のため（たとえば民族や国家）、
 また「一般的ナ、普遍的ナ、何カ価値トイフヤウナモノ」に連なるならば、一言で言って
 義にかなない意味ある死であるならそれは受け入れられる。」²² 島菌は、吉田の作品『戦艦大
 和ノ最期』から引用しつつ、対象が「義にかなない意味ある」ものである場合、それは犠牲
 に値すると論ずる。言い換えれば、倫理的価値が犠牲の有意味性を決するということであ
 る。この立論に所在する疑問点は、では犠牲行為に対する倫理的価値判断の主体は誰かと
 いうことである。ある人や時代状況において「義にかなない意味ある」とされた事柄が、別
 の人物や時代の変化において無価値・非倫理的と判断されることがある。戦時中に教師で
 あった三浦が日本の敗戦で経験したのは、まさしく倫理的価値の転覆状況であった。した
 がって島菌の論によって、三浦における犠牲理解の当否を判断することはできない。

現代の宗教学や思想史において議論される「犠牲」解釈をめぐる、見解を異にする立
 場を提示し、どちらの立場からも三浦における犠牲思想を評価することが困難であることを
 確認した。それをふまえて三浦における「犠牲」理解はどのように意味づけられるであ
 ろうか。結論を先取りして述べれば、三浦の犠牲理解は「生」とその意味づけへの強い傾
 きを有しているところに特徴がある。現代思想において、犠牲思想がときに厳しい批判に
 さらされるのは、人間の死が「犠牲」によって意味づけられ、さらには美化されることへ
 の否定である。国や理念、宗教思想といった価値への貢献であるという理由で人命喪失が

²⁰ 永井隆『長崎の鐘』サンパウロ（アルバ文庫版）、1995年、148頁。

²¹ 高橋哲哉『国家と犠牲』日本放送出版協会、2005年、192頁。

²² 島菌進『日本人の死生観を読む』朝日新聞出版2012年、188頁。

正当化され、またその論理によって人命が軽視され、人権が抑圧されることへの異議申し立てが「犠牲」批判として述べられている。それはいわば犠牲「死」の意味という側面から展開される議論であり、「犠牲」理解に対する厳しい批判はその点から生じる。

他方、三浦が「犠牲」を記すとき、そこには受け取った命の価値を認識していかに生きるかという「生」への強調がある。洞爺丸に乗船していたキリスト教宣教師の犠牲的行為について三浦は、『氷点』において「自分自身の救命具をやった宣教師のことを、啓造はベッドの上でも幾度も思い出したことだった。啓造には決してできないことをやったあの宣教師は生きていてほしかった。あの宣教師の生命を受けついで生きることは、啓造には不可能に思われた。あの宣教師がみつめて生きてきたものと、自分がみつめて生きてきたものとは、全くちがっているにちがいがなかった。」²³「啓造は生きているということが、どんなに厳しい事実であるかを、今度の海難事故で知ったつもりだった。あの痛ましい犠牲の上に生きている事実を生涯忘れずに、本当に真剣に生きようと啓造は旭川に帰ってきたのだった。」²⁴ 作品中の中心人物である辻口啓造を通して以上のように述懐させている。「犠牲」を受け取った存在として生きるということは、以前と同一線上にある自己の人生が、従前の生き方とは異なるものとなり、自らへ命を差し出した存在の生を重ね合わせることで自己の生が新たな意味づけを持つものとなる。

犠牲に接して人生が新たな意味を持つことにつき三浦は、『塩狩峠』で永野の婚約者である吉川ふじ子に託して「信夫の生きたかったように、信夫の命を受けついで生きる」²⁵と表現している。そして『塩狩峠』での吉川ふじ子と永野信夫の間における命を受けつぐ人生とは、『道ありき』に記された「彼が生きたかったであろうように、わたしは彼の意志を受けついで、生きられるだけ生きようと決意した」²⁶という三浦自身と前川正との命の関係そのものである。受けついで命をいかに意味深く生きていくかという生の課題を自らに引き受けることこそ、「犠牲」の命を引き継ぐ人生であると理解されている。三浦の「犠牲」理解は、死の側からではなく、生の側から如何に「犠牲」を受け止めていくかという視点を有している。そのことにこそ、三浦「犠牲」理解の特徴が存するのである。

イエス・キリストの「犠牲」と三浦作品

前項において三浦における「犠牲」理解が、死の意味づけよりむしろ生を意味づけ肯定する特徴を有している事実を確認した。このことは、夫である三浦光世が「綾子の本を読んでくださる方が、絶望から希望へ生きることができ、自殺など思いとどまってくださる

²³ 三浦『氷点 上』380頁。

²⁴ 三浦綾子『氷点 下』角川文庫版、昭和57年初版、平成24年改訂初版、6頁。

²⁵ 三浦『塩狩峠』342-343頁。

²⁶ 三浦『道ありき』280頁。

なら、なんと幸いなことであろう」²⁷と生を肯定し、生きる意味を見いださせる三浦作品の力について語っていることから理解できる。その三浦にとって、生の意味を根底で与えているのはイエス・キリストの十字架による犠牲であった。先にも引用したが『道ありき』における「わたしの命は、イエス様の命と引替に与えられたものなのだ。……わたしの命が尊いということの、本当の意味がわかった」²⁸との記述に、イエス・キリストの犠牲による自らの人生という自己理解が表現されている。それ故に三浦にとって、一度は社会的・精神的死を経験し身体的死を覚悟した後、新しくもうひとたび生きる意味とその人生での使命とは、自分を真に生かしている「犠牲」の出来事に込められたイエス・キリストの愛を伝えることであった。

三浦の執筆した多くの作品も上述の目的を有している。「三浦文学の最大の特徴はキリスト教の伝道を目的としているところにある。綾子にとって「キリスト教の伝道」は、教義を伝えるということよりも、イエス・キリストの十字架に端的に示されている神の愛を伝えることである」²⁹と評される。ここで述べられる「イエス・キリストの十字架に端的に示されている神の愛」こそが「犠牲」であり、キリスト教信仰とキリスト者が表現するその姿を、三浦は作品を通して伝えてきた。作品だけでなく講演活動においても三浦の姿勢は同じであった。本稿冒頭で触れた宮城学院における三浦の講演は文書記録によれば、『道ありき』に記された自伝的歩みとほぼ同一内容であったが、最後に「私の一生を闇から光りあるものに変えたのはまことに神の愛である。私は今ここに皆様のために心から神の子イエス・キリストをご紹介申上げる」³⁰と講演を結んでいる。有名作家としての自己を宣伝するのではなく、自分の人生を通してイエス・キリストを伝える姿勢はそこにもあらわれている。

本論考では死生観を切り口として、三浦の実存的生と重ね合わせて作品を分析し、死生観の中心にある「犠牲」思想とその特徴を確認してきた。最後に論者の専門であるキリスト教神学の観点から、三浦の「犠牲」理解について残存する問いを提出しておきたい。それはイエス・キリストによる「犠牲」と人間の「犠牲」行為との関係理解である。神学的にはキリストの犠牲は「究極的」であり「終局的」である。すなわちイエス・キリストの十字架が唯一の犠牲であり、人間はそれ以外の犠牲を神から求められないという神学的理解である。それであれば、三浦作品に登場する人間の犠牲的行為とイエス・キリストの「犠牲」とはどのような関係にあるのかという神学的問いが生じてくる。むしろ三浦は神学を専門的に学んだ牧師ではなく、上述の問いは直接的に三浦自身の関心ではなかったと考えられる。しかし三浦作品の読者が、作品に登場する人物によってなされる犠牲的行為

²⁷ 三浦光世『死ぬという大切な仕事』光文社文庫版、2004年、22頁

²⁸ 三浦『道ありき』317頁。

²⁹ 竹林一志『三浦綾子文学の本質と諸相』新典社、2022年、30頁。

³⁰ 『宮城学院同窓会会報 11』宮城学院同窓会発行、1969年、27頁。

をキリストの犠牲の「模倣」として受け止め、そのような生き方をしなければキリスト者たり得ないと理解されるならば、それはプロテスタント・キリスト教の信仰内容と隔たりのある解釈をもたらすことにもなりかねない。今後の課題として、三浦作品の諸テキストをより詳細に分析しつつ、この点を考究することとしたい。

※本稿の一部は宮城学院キリスト教講座「三浦綾子における死と生」(2023年6月16日)での発表内容を基としている。

三浦綾子の宮城学院来訪記録に関しては、宮城学院資料室の佐藤亜紀氏が資料探索くださった。記して感謝を申し上げる。

(まつもと しゅう／宮城学院女子大学一般教育部准教授)